

令和8年10月28日

各報道機関文教担当記者 様

能登半島地震後の子どもを3時点で追跡 抑うつ症状や攻撃行動が、その後の孤独感と関連 — 子どものころを複数の側面から継続的に支える重要性 —

金沢大学人間社会研究域人文学系／子どものころの発達研究センターの村山恭朗准教授を中心とする共同研究グループは、令和6年能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県輪島市の小学3年生から中学3年生を対象に、孤独感、抑うつ症状、攻撃行動、向社会的行動の相互の関連を約7か月にわたり追跡しました。その結果、**抑うつ症状や攻撃行動が、その後の孤独感の強さと関連すること示されました。さらに、孤独感と抑うつ症状の間には双方向の関連が認められ、特に、抑うつ症状からその後の孤独感への関連が強いことが明らかになりました。**

本研究では、2024年7月、10月、2025年2月の3時点で調査を行い、634人（男子303人、女子331人）を分析対象としました。孤独感、抑うつ症状、攻撃行動、向社会的行動を同時に扱う交差遅延パネルモデルを用いて、それぞれの状態が時間を経てどのように関連し合うかを検討しました。

分析の結果は、子どもの心理社会的適応を、孤独感や抑うつ症状だけに限定せず、行動面や対人関係を含む複数の側面が相互に関わるものとして捉える必要性を示しています。

災害後の支援においては、表面化しやすい問題だけでなく、目に見えない孤独感や抑うつ症状などの変化にも継続的に目を向け、複数の側面を統合して支援することが重要と考えられます。本研究は、災害そのものの因果的影響を検証したものではありませんが、**大規模災害後という高ストレス環境にある子どもたちのころの変化を長期的かつ多面的に理解するための重要な知見を提供するものです。**

本研究成果は、2026年9月11日に、国際学術誌『Child Psychiatry & Human Development』に掲載されました。

【研究の背景】

孤独感は、子どもや青年のメンタルヘルスと密接に関連する重要な心理的要因です。これまでの国際的な研究では、孤独感の強さと抑うつ症状との関連が繰り返し報告されてきました。一方で、子どもの心理社会的適応には、抑うつ症状のような感情面だけでなく、攻撃行動や他者を助ける向社会的行動などの行動面も重要な役割を果たします。こうした複数の側面を踏まえることが重要であるにもかかわらず、孤独感、抑うつ症状、攻撃行動、向社会的行動の4つを同時に扱い、それらが経時的にどう影響し合うのかについて縦断的に検討した研究は限られていました。

発達心理学・発達精神病理学では、ある側面（例えば、友人関係）で生じた変化が別の側面（例えば、学業成績）の変化を引き起こし、それがさらに別の側面（例えば、親子関係）の変化へ波及していく「発達カスケード」という理論があります。本研究では、この理論的枠組みに基づき、孤独感を社会・認知的側面、抑うつ症状を感情的側面、攻撃行動と向社会的行動を行動的側面として捉え、これらの時間的な相互関連を検討しました。

本研究の対象は、令和6年能登半島地震で甚大な被害を受けた石川県輪島市の小中学生です。個々の児童生徒がどの程度の被災経験をしたかは直接測定していないため、地震の影響そのものを検証する研究ではありませんが、災害後の復旧・復興期という高ストレス環境の中で子どもたちの心理社会的適応を継続的に追跡した貴重な縦断データを活用しています。

【研究成果の概要】

石川県輪島市内の全公立小・中学校に在籍する小学3年生から中学3年生を対象に、2024年7月、10月、2025年2月の3回、学校の教室内でタブレットを用いた調査を実施しました。分析には、初回調査に参加し、その後少なくとも1回の調査に参加した634人（男子303人、女子331人）を対象としました。孤独感、抑うつ症状、攻撃行動、向社会的行動について、前の時点での各指標の水準や性別・学年を考慮したうえで、その後の他の指標との関連を検討しました。

分析の結果、抑うつ症状や攻撃行動が強い児童生徒ほど、その後（本研究では、3か月から4か月後）の孤独感が強まる傾向が確認されました。最も特徴的な結果は、**抑うつ症状と攻撃行動が、一貫してその後の孤独感の強さと関連**していた点です。また、本研究では、**孤独感と抑うつ症状が相互に関連し合うことで、悪循環につながる可能性**が示されました。特に、この関連は双方向に認められたものの、抑うつ症状からその後の孤独感への関連（ $\beta = .234, .150$ ）は、孤独感からその後の抑うつ症状への関連（ $\beta = .081, .058$ ）よりも強く認められました。

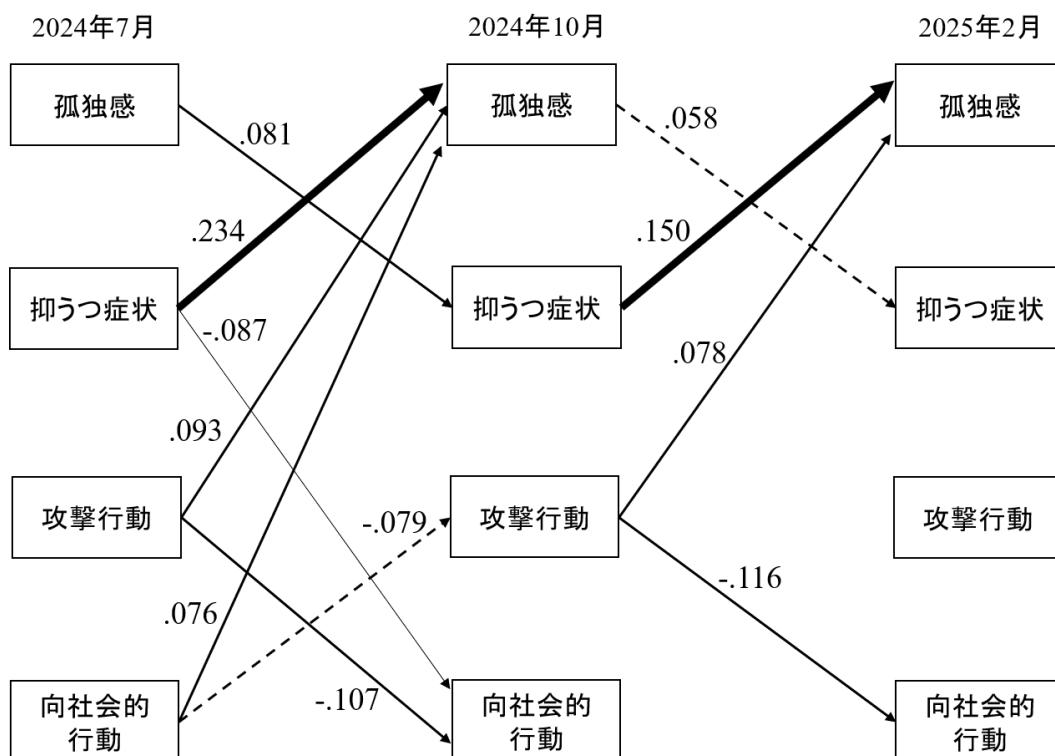
さらに、攻撃行動はその後の孤独感（ $\beta = .093, .078$ ）および向社会的行動の低さ（ $\beta = -.107, -.116$ ）と関連していました。これらの結果は、感情面、行動面、社会・認知的側面がそれぞれ独立しているのではなく、時間の経過とともに相互に影響し合うという発達カスケードの考え方と整合するものです。

【今後の展開】

本研究の重要な点は、子どもの孤独感を単独の問題として捉えるのではなく、抑うつ症状や攻撃行動、向社会的行動を含む複数の心理社会的側面の中で理解する必要性を、縦断データから示したことです。特に、抑うつ症状がその後の孤独感と強く関連していたことから、子どもが孤独を訴えているかどうかだけでなく、気分の落ち込みや意欲の低下などの情緒的な不調を早期に把握し支援することが、その後の社会的孤立感や孤独感の予防・軽減につながる可能性があります。

また、攻撃行動がその後の孤独感や向社会的行動と関連していたことは、問題行動を単なる「困った行動」として扱うのではなく、その後の対人関係やこころの状態にも関わり得るサインとして捉える視点の重要性を示しています。災害後など支援資源が限られる状況においても、感情・行動・対人関係を切り離さず、学校や地域で継続的に見守る多面的な支援が有用と考えられます。

本研究は、JST ムーンショット型研究開発事業（JPMJMS229C-14a）の支援を受けて実施されました。



図．孤独感、抑うつ症状、攻撃行動、向社会的行動の経時的関連

注）実線および太線は統計学的に有意（ $p < .05$ ）な関連を示す。そのうち、太線は「強

い効果」を示す。破線は統計学的に有意傾向 ($p < .10$) にある関連を示す。

【掲載論文】

雑誌名 : *Child Psychiatry & Human Development*

論文名 : Longitudinal Interrelations Among Loneliness, Depressive Symptoms, and Social Behaviors in Youth: A Cross-Lagged Panel Study in a Post-Disaster Context

(災害後の子ども・青年における孤独感、抑うつ症状、社会的行動の縦断的相互関連 : 交差遅延パネルモデルによる検討)

著者名 : Yasuo Murayama ^{1), 2)}, Makiko Nishiura ³⁾, Daiki Soma ⁴⁾, Masafumi Kameya ⁴⁾, Sanae Tanaka ²⁾, Masatsugu Tsujii ⁵⁾, and Mitsuru Kikuchi ^{2), 4)}

(村山恭朗、西浦真喜子、相馬大輝、亀谷仁郁、田中早苗、辻井正次、菊知充)

所属

- 1) 金沢大学 人間社会研究域 人文学系
- 2) 金沢大学 子どものこころの発達研究センター
- 3) 大和大学 社会学部
- 4) 金沢大学 医薬保健研究域 医学系 精神行動科学
- 5) 中京大学 現代社会学部

掲載日時 : 2026 年 9 月 11 日

DOI : <https://doi.org/10.1007/s10578-026-02096-2>

【用語解説】

※1 孤独感

周囲に人がいるかどうかだけでなく、自分が望む人間関係と実際の人間関係との間に隔たりがあると感じる、主観的でつらいこころの状態。

※2 交差遅延パネルモデル (Cross-Lagged Panel Model)

複数の心理的・行動的な指標を複数時点で測定し、前の時点の状態を考慮しながら、ある指標が後の別の指標とどのように関連するかを検討する統計モデル。本研究では因果関係を直接証明するものではなく、時間的に先行する縦断的関連を評価しています。

※3 発達カスケード理論 (Development Cascade Model)

発達の過程で、感情、行動、対人関係など、ある領域での変化が別の領域に波及し、それらが相互に関連しながら発達していくという理論モデル。

【本件に関するお問い合わせ先】

■ 研究内容に関すること

金沢大学人間社会研究域人文学系／子どものこころの発達研究センター 准教授

村山 恭朗（むらやま やすお）

TEL : 076-264-5539（金沢大学人間社会研究域）

076-265-2857（子どものこころの発達研究センター）

E-mail : y-murayama@staff.kanazawa-u.ac.jp

■ 広報担当

金沢大学人間社会系事務部総務課総務担当

空 麻里子（そら まりこ）

TEL : 076-264-5450

E-mail : n-somu@adm.kanazawa-u.ac.jp